



外科助教
増田隆明

日本では現在、2人に1人ががんになり、3人に1人ががんで亡くなっています。

がんは悪性腫瘍の一つです。良性腫瘍との違いは、発生した臓器などからがん細胞が離れ、血流に乗って全身に回り、別の臓器な

どで増殖する「転移する」能力を持っていること。これは、手術などでがんが消えたとみられた後に再発する原因と考えられています。転移や再発を起すこと完治が困難となり、亡くなることも多いため、転移再発を抑えることが最も大きな課題となっています。

がんの転移は、がん細胞と宿主細胞(正常細胞)の相互作用が関わっていると考えられ、宿主細胞が、がん細胞が転移するのに都合のよい環境を整えていると考えられています。がん細胞と宿主細胞の関係は、鳥の卵と巣の関係に似ています。良性腫瘍との違いは、発生した臓器などからがん細胞が離れ、血流に乗って全身に回り、別の臓器な

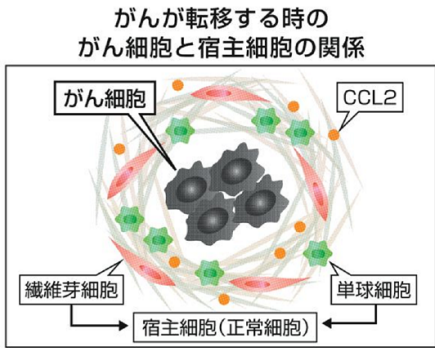
転移を促進してきます。結果が良好ですと、今後プロバゲルマニウムががんの転移再発抑制薬として使用されるようになることも考えられます。

これからのがんによる死亡者を一人でも減らせるように、新たな治療薬の開発や臨床試験に取り組んでいきます。

プロバゲルマニウムはがん患者への安全性は確認されていますが、がん患者に使用できませんでしたが、がん患者に対する安全性や有効性を確認するため、まずは乳がん患者で臨床試験を始める予定です。

プロバゲルマニウムががんの転移再発抑制薬として使用されるようになることも考えられます。

結果が良好ですと、今後プロバゲルマニウムががんの転移再発抑制薬として使用されるようになることも考えられます。



- がん細胞と宿主細胞の関係は鳥の卵と巣に似ていて、宿主細胞から分泌されるホルモンの一つ「CCL2」が、がん細胞の増殖を助けている
- プロバゲルマニウムはCCL2の作用を阻害することでがんの転移を防ぐと期待されている

乳がん転移再発の新たな予防薬の臨床応用への取り組み

「巣」の形成を抑制

肝炎治療薬の効果確認へ